

TOGARIISHI SITE

特別史跡

# 尖石遺跡

—— 平成13年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書 ——

2002年3月

茅野市教育委員会

TOGARIISHI SITE

特別史跡

# 尖石遺跡

—— 平成13年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書 ——

2002年3月

茅野市教育委員会

## はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

永年、地権者の皆さんや地元の人々の理解と熱意によって、保存されてきましたが、近年の開発はついに尖石遺跡の周辺にも及んできました。そこで茅野市では、このすばらしい郷土の文化遺産を保存し、後世に受け継ぐべく昭和62年度から国・県のご援助をいただき、尖石遺跡の公有地化を行い、平成2年度からは引き続き記念物保存修理事業（環境整備）に着手いたしました。

記念物保存修理事業（環境整備）の一環として行われている試掘調査は、尖石遺跡の整備計画を作成していく上での基礎的な調査として実施されているものであります。

その試掘調査も1年間の休止はありましたが、今回で9回目となりました。平成10年度には、隣接する地にある尖石考古館の新築開館にあわせ、新たに国の特別史跡に追加指定された、従来与助尾根遺跡と呼ばれていた地区的調査を行い、平成11年度にはニセアカシアの伐採、復元住居の取り壊し、園路整備を行い、平成12年度には復元住居6棟の建設、172本の落葉広葉樹の植栽を行い史跡公園として整備を行いました。

今年度は、尖石遺跡の南側の試掘調査を行いました。この地区は、宮坂英氏も調査を行っていない箇所であり、これまでの周辺の試掘調査の結果からも、多くの遺構の検出が見込まれるところでしたが、予想を遥かに上回る遺構の検出がありました。

こうした調査成果をふまえ、今後の史跡整備に一層の努力をして参る所存でありますので、皆様の一層のご協力をお願いいたします。

最後に、この事業の実施にあたってご指導いただいた文化庁、長野県教育委員会をはじめ、調査に参加された関係者の皆様に対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成14年3月

茅野市教育委員会  
教育長 両角 源美

## 例言・凡例

1. 本書は、特別史跡尖石石器時代遺跡記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書である。
2. 試掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 試掘調査は、平成13年7月13日から12月13日まで行った。  
整理作業は、平成13年12月13日から平成14年3月27日まで行った。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、尖石繩文考古館で実施した。  
本報告書に係る出土品・諸記録は、尖石繩文考古館に保管している。
5. 整理作業終了間際になって、委託した杭打ち作業での調査区の表示に誤りがあることが確認された。報告書中の表示についてはすべて誤りを正してあるが、すでに遺物への注記が終了しているため、収蔵コンテナと収納してあるビニール袋のみを訂正し、遺物については修正を行っていない。
6. 本報告書の執筆は、小林深志が行った。
7. 調査の体制  
本調査は茅野市教育委員会が実施した。組織は以下の通りである。

特別史跡尖石石器時代遺跡整備委員会

特別委員

坪井清足 (財団法人元興寺文化財研究所所長)

専門委員

戸沢充則 (尖石繩文考古館名誉館長・明治大学教授)

清水擴 (東京工芸大学教授)

土田勝義 (信州大学教授)

龟山 章 (東京農工大学教授)

宮坂光昭 (長野県遺跡調査指導委員)

小平 学 (学識経験者)

指導助言

本中真 (文化庁文化財部記念物課主任調査官)

矢澤成彦 (長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課課長)

調査主体者

両角源美 (教育長)

事務局

伊藤修平 (教育次長)

矢崎秀一 (文化財課長)

鵜飼幸雄 (尖石繩文考古館長・史跡公園係長)

調査担当 小林深志 (尖石繩文考古館学芸員)

発掘調査・整理作業協力者

稻垣幸子 牛尾チトセ 太田義明 北沢もと 北沢洋子 久保山きみ子 黒原 昇

小平千恵子 小平フサ子 小宮山力 武田ケサ子 東城久美子 中川聰史 本間登喜朗

山崎裕子 渡辺郁夫

## 目 次

はじめに	茅野市教育委員会 教育長 向角源美
例 言	
目 次	
第1章 調査の目的.....	1
第2章 調査の方法と経過.....	1
第1節 調査の方法.....	1
第2節 調査の経過.....	1
第3章 遺構と遺物.....	2
第4章 ま と め.....	29
図 版	
抄 錄	

## 第1章 調査の目的

茅野市教育委員会では、平成2年度から国庫及び県費の補助を受け、尖石遺跡整備のための事前の造構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、尖石遺跡の南側である。この地区は、宮坂英氏が全く調査を行ったことのない箇所であるが、これまでの試掘調査の成果からも、縄文時代中期前半の集落と後半の集落の接点となっている箇所であり、多くの遺構の検出が予想されるところであった。また、今後の尖石遺跡の整備を進めるにあたって、復元する住居の選定や仮設してある園路の設計に欠かせない重要な地点でもある。

その重要な地点の調査を行うにあたって、これまでの遺構の位置とプランを確認する作業、さらに遺構の時期を確認するための若干の上層の掘り下げだけでは、かえって遺構を破壊してしまうとの考え方から、計画したグリッドの中は徹底的に調査を行い、遺構の性格を調査することとした。

## 第2章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

特別史跡尖石遺跡は、指定地の用地購入が終った翌年の平成2年度から、記念物保存修理事業（環境整備）のため継続して試掘調査が行われ、今年度で9年目を迎えることとなった。過去9年間の調査については、それぞれ試掘調査報告書が刊行されている。

平成2年度に試掘調査を開始するにあたって、尖石遺跡全体を大きく4つに分け、北西隅をI区とし、時計回りにII区、III区、IV区と区画の名称をついている。その各区画ごとに遺跡範囲の全体を覆うように東西南北にあわせて大きさ10m四方の大きな正方形のグリッドで区切り（大グリッド）、X軸を大文字のアルファベット、Y軸を数字で呼称している。さらにその大グリッドを2m四方の小さなグリッド（小グリッド）としてX軸を小文字のアルファベット、Y軸を数字で表し、合わせてI区A1a1のように呼称している。

今回調査の対象としたのは、遺跡の南側には中央で、環状集落の南側の住居址が多数検出されるのではないかと考えられている地区である。調査対象面積は約2,000m<sup>2</sup>、調査面積は1/5の400m<sup>2</sup>を予定した。

掘り下げにあたっては、できるだけ少ない調査面積で住居址等の遺構の検出がすべて把握できるように、グリッドの間隔が4mを越えないように計画的に設定した。

検出した遺構については、確実に住居址と分かるものも幾つか見られたが、住居址か土坑かが不明なものも多いため、その部分については拡張するなどして遺構の性格を把握するようにつとめた。

### 第2節 調査の経過

調査にはいる前に、7月12日から委託業務による杭打ち作業を開始する。また、13日からは作業員を動員し、機材の搬入作業にはいる。そして、杭打ち作業の終了した箇所からビニール紐による調査区の設定を行った。

グリッドの掘り下げに入ったのは8月16日からである。調査は、調査予定範囲の東側が尖石縄文考古館の行事に使用する予定であったため、西側から掘り下げを行うこととする。

調査区の掘り下げ、遺物取り上げ、完掘、実測作業を繰り返し行いながら進めていった。今年度は、特に遺構の密集することが予想される箇所であるが、遺構の性格を正確に把握し、史跡整備に役立てられるよう、遺構の確認にとどまらず、遺構の掘り下げを行うこととしたため、調査には多くの時間を要した。また、市内の他遺跡の発掘調査にあわせ、土・日曜日を休日にした他、尖石繩文考古館の休館日である月曜日にも作業を行わなかったため、作業は遅々として進まなかった。

発掘調査は12月12日までに掘り下げと図面作成を終了した。調査した箇所については埋め戻し工事として外部委託し、重機により行った。その重機による埋め戻し工事も12月13日には終了し、現地でのすべての作業を終了した。

なお、今年度の試掘調査では、通常の発掘作業以外に、グリッドの設定を行い、掘り下げを開始する前の7月15日（土）、16日（日）の両日には、尖石繩文考古館の活動として、ワークショップ共同研究班が1m間隔にポーリング調査を行い、遺構の有無を探った。また、9月1日（土）、10月13日（土）、11月3日（土）には、同じく共同研究班による体験発掘も行った。

### 第3章 遺構と遺物

今回検出・確認した遺構は住居址と考えられる掘り込み、炉、周溝、平坦な床面等が確認され、確実に住居址と考えられるものが22軒あった。その住居址内にも、直接住居址に関係ないと思われる土坑、柱穴状の遺構が多数検出されたが、それらを除き、外側で検出された土坑や住居址の柱穴になるのではないかと思われるものだけで164基を数えた。

#### IVK4e2（第3図、図版2-1・2）

20cmほどの表土を取り除くと、10cmほどの黒色土を経て暗褐色土となる。さらに20~30cmで平坦なローム面となるがその移行は突然である。層内には多くの遺物が出土し、復元可能な縄文土器も2点出土した。住居址の内部となる可能性が高いが、調査区内に壁面や炉は検出されていない。北東隅の穴は、深さが床面から20cm弱で、柱穴とは言い難い。南西隅の穴は、床面からの深さが45~50cmあり、柱穴としていいものと思われる。住居址との位置関係では不明であるが、完形品となる土器が出土した周辺が中心となり、この柱穴が南西隅に位置するのではないかと考えられる。

南西隅に土坑があるが、土層観察によると表土層直下から掘り込まれており、ロームブロックを多量に含む締まりのない土層で、時期は不明なもの、住居よりはかなり新しいものと考えられる。床面からの深さは35cmほどしかないが、掘り込みの確認できる表土層直下からは70cm近くとなる。

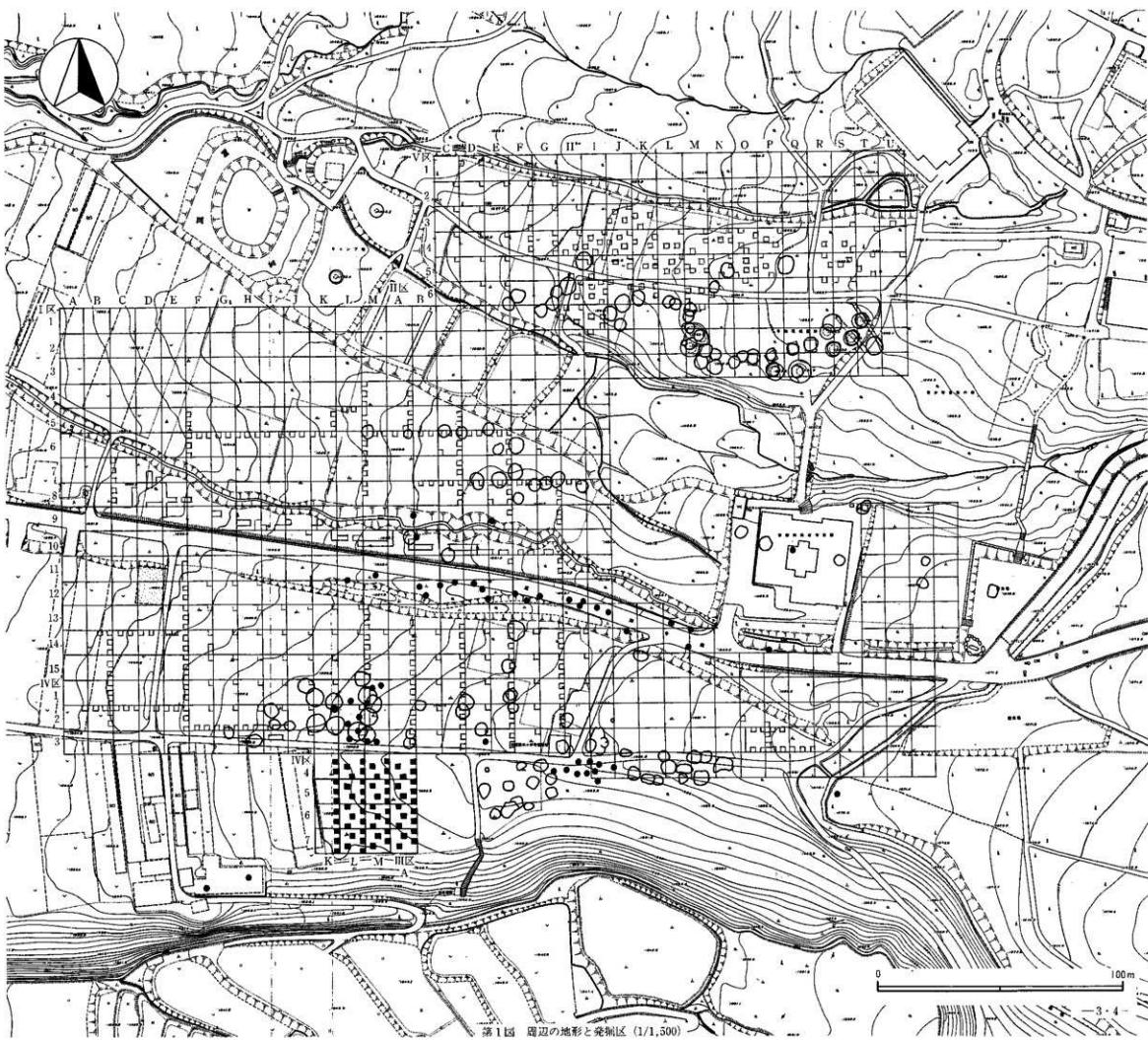
調査区内からは、前述した完形となる縄文土器2点（第11図1・2、図版9-1・2）を含め、128点の縄文土器破片、礫・石器が出土した。住居址の時期は、出土した土器から曾利1~2式期と考えられる。

#### IVK4e4（第3図、図版2-3）

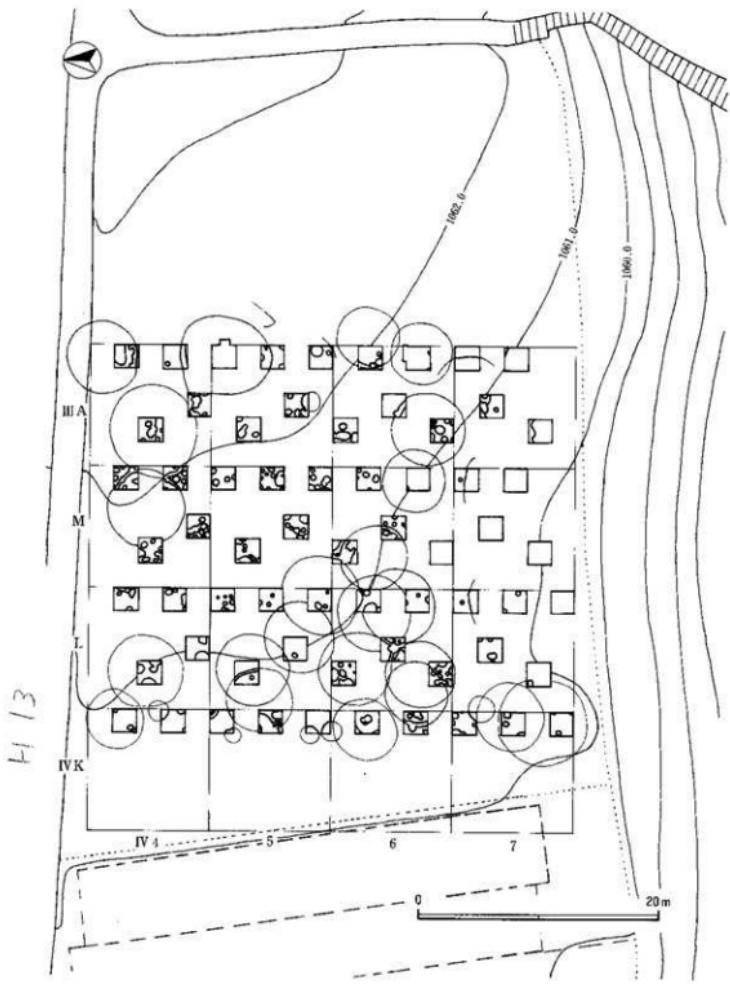
表土層を取り除くと、遺物包含層を経てローム面まで漸次移行する。遺物の出土も少なく、51点の縄文土器片、礫・石器が出土しただけである。北東隅、南東隅、南西隅に遺構が確認されている。

北西隅の遺構は、包含層の直下に掘り込み面があり、縄文時代の遺構と考えられるが、IVK4e2、IVL4b3にまでその痕跡が至っていないことから、住居址ではなく、土坑になるものと考えられる。深さは遺構確認面から65cmほどである。

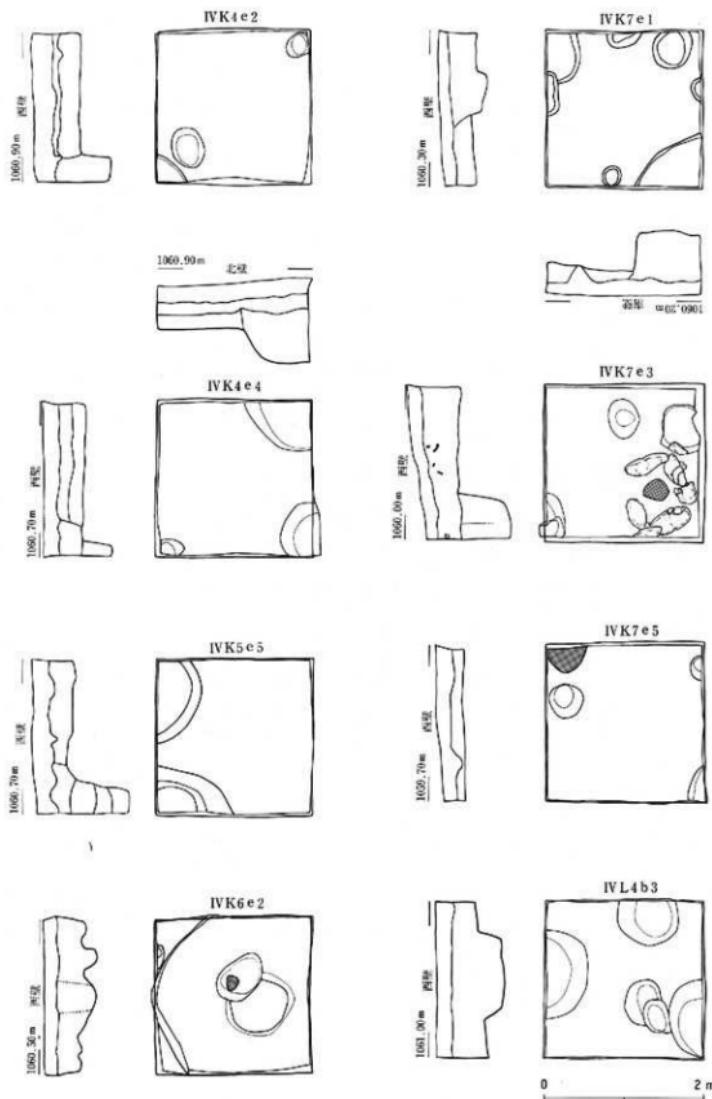
南西隅の遺構は掘り下げた壁面の様子から直径1m未満の土坑になるものと考えられる。深さはローム面



第1図 周辺の地形と発刺区 (1/1,500)



第2図 発掘区と遺構の分布 (1/400)



第3図 検出された遺構と土層堆積状態(I) (1/60)

から35cmほどである。

南西隅の小さな遺構は、土層の観察から表土層直下から掘り込まれた少し大きな穴と、ローム面で確認された柱穴状の小さな穴に分けることができるが、分層することができ、同時に存在していたものかどうかは明らかでない。深さは、ローム面からは37cm、掘り込み面からは65cmを測る。

#### IVK5e5 (第3図、図版2-6)

北西隅と南西隅の2箇所に遺構が検出された。北西の遺構は、深さが10cmほどで、底面もあまりしっかりしていない。遺構もローム漸移層上面では確認できず、ローム面に至ってようやく確認した。遺構の可能性は少ないと想われるが、遺構であったとしても径1mほどの円形の土坑であろう。

南西隅の遺構は、柱穴になると考えられる。北壁側が比較的直に立ち上がるのに対して、東壁側は直に立ち上がった後、聞く形態をとり、太い柱を立てる際に傾斜をつけたかの様である。深さは漸移層上面から90cmほどである。覆土は4層に分層でき、徐々に堆積した様子を表している。周辺に住居址の遺構が確認できていないので、単独の柱穴、または、方形柱穴列などの柱穴の一部と考えられる。

遺物はそれぞれの遺構から数点ずつが出土しているだけである。

#### IVK6e2 (第3図、図版2-7)

調査区の大部分を占める大きな遺構は、IVK5e3で見られたものと同様、鉄製の工具を使った時期の新しいものである。覆土も大きなロームブロックを多量に含む、掘り上げ後直ちに埋め戻したと考えられるものである。中央にやや高いところがあるので、ここも幅1mほどの溝状、または、ドーナツ状に掘り込んだものであると考えられる。

この遺構にはほとんどを破壊されているものの、縄文時代の遺構の痕跡を所々で確認することができる。

中央の遺構は、覆土内に焼土の塊があるが、柱穴として良いものである。また、東壁際には小さな遺構も観察できる。さらに、壁面で観察されるローム面が、周辺に比べかなり低い位置にあることから、形態や規模は明らかでないものの、この調査区が住居址内である可能性が高い。

遺物は、ほとんどのものが原位置と離れた場所から出土していると考えられるが、出土量は多い。大きく壊されている住居址は、それらの遺物から、曾利3式期のものと考えられる。

#### IVK7e1 (第3図、図版3-1)

住居址と考えられるような痕跡は確認できなかったが、いくつかの遺構を検出している。

ほとんどが深さ10cmから15cmの浅いものであるが、北東にあるものは深さが36cmとしっかりしている。南東隅にある遺構は、IVK5e3やIVK6e2で見られたものと同様、覆土にロームブロックを多量に含むもので、時期の新しいものである。

#### IVK7e3 (第3図、図版3-2)

15cmほどの表土層を取り除くと、直ちに中期後半に見られる掘り炬燵状の大形の石圓炉が現れ始める。さらに掘り下げると、炉石が浮いてしまい、出土する土器も中期中葉のものに変わる。

途中、貼り床等の痕跡は全くなく、周囲の土層観察からもその痕跡は見られないが、時期の異なる住居址が重複していることは間違いない。2m南に離れたIVK7e5では、本調査区で確認された床面とほぼ同じレベルで床面が確認され、そこで地床が検出されていることから、その地床炉を中心とする住居の床が、本調査区で確認された床面であろう。

検出された右圓炉は、一部を除きほぼそのまま残っているが、火をかなり受けているようで、炉石はいくつかに割れている。

本調査区には柱穴と考えられる遺構が3基ある。北東の柱穴は深さ55cm、北側中央の柱穴は深さ63cm、南西隅の柱穴は深さ65cmを測る。南西隅の柱穴は、柱痕と周辺のロームを埋めた跡とがはっきりと区別できる。いずれの柱穴も、炉址に近すぎることから、IVK 7e5で確認された住居址の柱穴と考えられる。

#### IVK 7e5（第3図、図版3-3）

20cm足らずの表土層を取り除くと、直ちに平坦なローム面となるが、耕作で荒れた中にも、良く踏み固められた床面が検出された他、北西隅では地床が検出され、住居址であることが確認された。

柱穴と考えられる遺構も2基確認されているが、炉址に近いことからIVK 7e3で検出された中期後半の石圓炉を持つ住居址の柱穴ではないかと考えられる。北東隅の柱穴は深さが57cm、西側の炉の南側にある柱穴は31cmを測る。南東隅で検出された遺構は深さが45cmあるが、径が大きく、貯藏穴のようなものになるのではないかろうか。

遺物は表土層の下が直ちに床面となってしまっているため、量は少ない。

#### IVL 4b3（第3図、図版3-4）

表土層を取り除き、掘り下げを開始すると、多くの遺物が出土し始める。60cmほどで、平坦な面が現れる。特に堅い床面というわけではなく、炉址や壁面などは検出できていないが、多量の遺物の出土もあることから、住居址になるのではないかと考えられる。周辺の調査区で、この住居址に間わると考えられる遺構は検出されていないので、規模はそれほど大きくなのではないかろうか。

この調査区内には大小5基の遺構が検出されている。北壁際の遺構は深さが48cm、西壁際の遺構は深さ33cm、東壁際の遺構は深さ33cmで、どれも土坑になるのではないかと考えられる。中央のやや南東にある2基の遺構は、深さが25cmと4cmとやや浅いものの、柱穴状の遺構である。

遺物は、細文土器破片、礫・石器併せて262点が出土している（図版12-2・9）。調査区内東側の床面直上からは、口縁部及び底部がないものの、曾利2式の大形の深鉢（第11図5、図版9-5）が横につぶれた状態で出土している。

#### IVL 6b1（第4図、図版3-6）

20cmほどの表土層を取り除くと、遺物が出土し始め、40cmほどで平坦なローム面に至る。南東隅に石圓炉が検出され、住居址の床面であること理解される。

柱穴状の遺構もいくつか検出されているが、そのうち中央のものはロームが埋められ床を貼っていることから、住居の廃絶時には使われていなかったことが理解される。

遺構のそれぞれの深さは、東壁際のものが16cm、北壁際中央のものが60cm、その西側が15cm、西壁際北側のものが8cm、南側のものが29cm、中央のものが59cmである。

検出されている住居址の時期は、石圓炉甕が使用されている炉体土器（第11図6、図版9-6）から井戸尻1・2式期と考えられる。

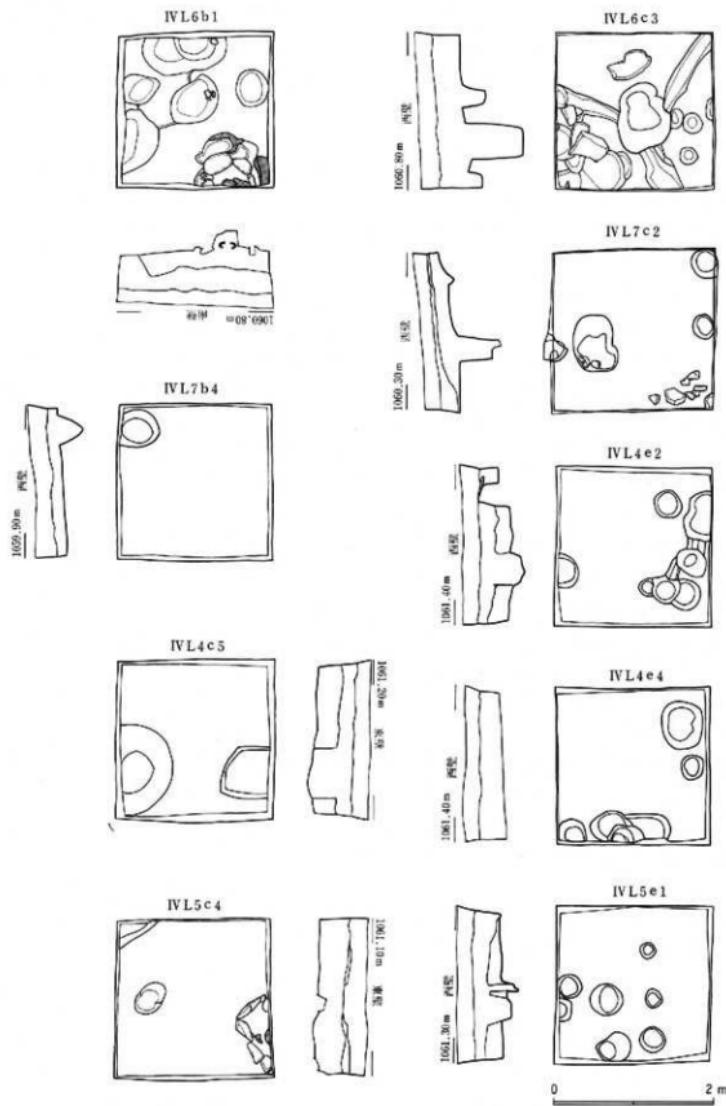
#### IVL 7b4（第4図）

20cmほどの表土層を取り除くと、ローム漸移層となり徐々にローム層へと変わっていく。北西隅に深さ36cmの遺構があり、柱穴のようであるが、堆積している土層とローム面での傾斜が北側と南側では20cmあることを考えあわせると、住居址などの大きな遺構にはならないであろう。

本調査区からは、遺物の出土はなかった。

#### IVL 4c5（第4図）

表土層を取り除いた後、暗褐色土を徐々に掘り下げ、ローム漸移層を経てローム面にまで至ったところ、



第4図 検出された遺構と土層堆積状態(2) (1/60)

東壁にローム漸移層を掘り込み面とする土坑が確認された。すでに遺構の西半分を掘り下げてしまっていたが、ローム面にわずかにその痕跡を認めた。

西側壁際の遺構は、終了のために清掃を行っていて確認したが、覆土が明るい褐色で、色調はロームとはとんど変わらない。深さ30cmほどの皿状の土坑である。

#### IVL 5c4 (第4図、図版3-7)

表土層を取り除いた後、暗褐色土を掘り下げていくと、南東隅に長方形になると思われる石窯が検出された。西側中央には本住居址の柱穴となる50cmほどの遺構がある。また、北西隅には、別の遺構が検出されているが、底面のレベルからIVL 5b2で検出したがに関わる住居址の南東端にあたるのではないかと考えられる。

遺物は、134点もの縄文土器片、礫・石器が出土している。

#### IVL 6c3 (第4図、図版3-8)

ローム面まで掘り下げたところ、南西へ広がる周溝と、東側へ広がる周溝の2つが検出された。2軒の住居址がちょうどこの調査区で交わっているようである。また、この2基の住居址の外側にあたる箇所も住居の内側と同レベルで、包含層から多くの遺物が出土している。IVL 6b1で検出されている石窯炉とほぼ同レベルであることから、その住居址がこの調査区にまで広がっていると考えられる。都合3軒の住居が重複していることになろうか。それぞれの住居址内には多くの柱穴が検出されている。

#### IVL 7c2 (第4図)

表土層を取り除くと、ローム混じりの荒れた黒色土となるが、その下に、遺物包含層が見受けられる。その層を掘り下げると、柱穴状の遺構が4基検出された。遺構はローム層でも下層にある、礫混じりの層を掘り込んでおり、壁面に礫が顔を出している。そのため、形態も不整形である。

柱穴の深さは、北東隅のものが60cm、東側中央のものが30cm、中央のものが68cm、西壁際のものが40cmである。大形の土器片をはじめ(第11図7、図版9-7)、40点余の縄文土器片が出土しているが、調査区が何らかの遺構に関わるものかは不明である。

#### IVL 4e2 (第4図)

西壁際には1基の柱穴、東側に6基の柱穴が検出された。東側の柱穴は、溝で連結しており、住居址の周溝の一部かとも考えられたが、調査区の壁面を観察しても住居址の覆土のような堆積状態を示している箇所はない。柱穴の深さは、北側のものが40cm、南側のものが30cmあるが、他は10-20cmと浅い。

遺物は、縄文土器片や礫・石器あわせても27点と少ない。

#### IVL 4e4 (第4図)

20cm弱の表土層を取り除くと、ローム漸移層となり、徐々にローム層へと変わっていく。住居址などの大きな遺構は検出できなかったが、いくつかの遺構が検出されている。

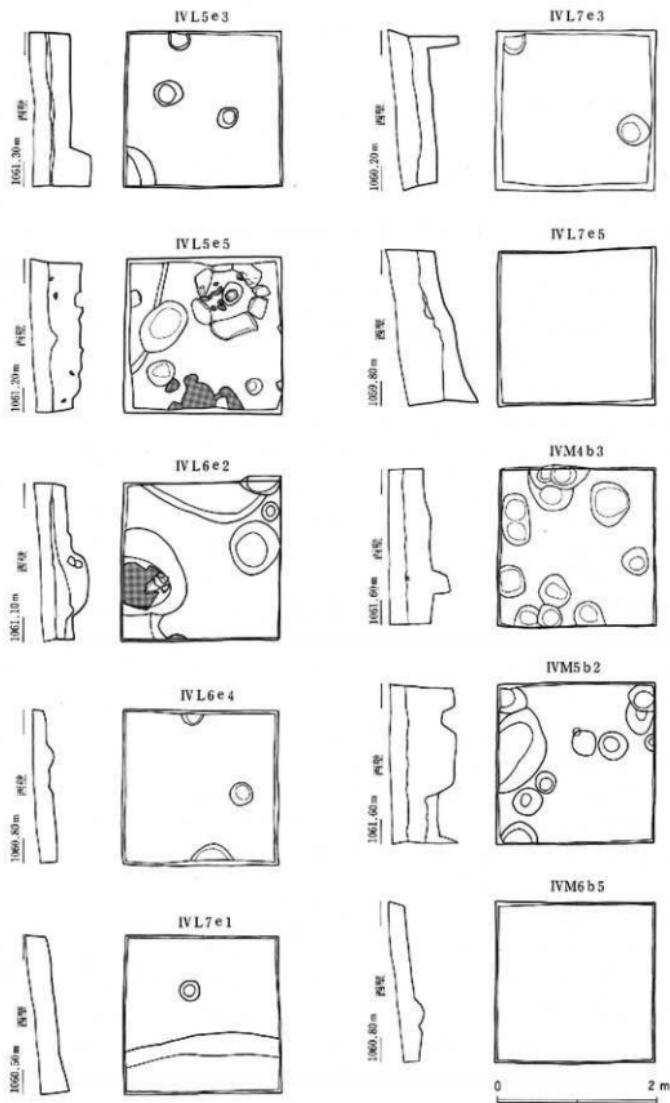
北東で検出された遺構は、深さが25cmある。その南側の小さな遺構は、深さがわずか9cmである。南北隅の遺構は、深さ25cm、南壁際には3基並ぶ遺構は、西から25cm、45cm、14cmである。

遺物は、21点の縄文土器片、礫・石器が散在していたにすぎない。

#### IVL 5e1 (第4図、図版4-1)

調査区内に7基の柱穴状の遺構が検出されている。深さは12cmから39cmとまちまちである。また、調査区の堆積状態を見ても、住居址などの大きな遺構に関係すると考えられるものはない。

遺物は、13点の縄文土器片、礫・石器が散在していたにすぎない。



第5図 検出された造構と土層堆積状態(3) (1/60)

#### IVL 5 e 3 (第5図、図版4-2)

調査区内に、3基の柱穴状の遺構と、やや大きな遺構1基が検出された。柱穴状の遺構は深さが9cm~19cmである。

南西隅で検出された遺構は、深さが25cmほどであるが、底面がIVL 5 c 4で検出された石圓炉を持つ住居址の床面と同じレベルであることから、その北東端にあたるのではないかと考えられる。

遺物は、17点が散在していたにすぎない。

#### IVL 5 e 5 (第5図、図版4-3)

表土層を取り除くと、多くの遺物が出土し始める。北東側では石圓炉が検出され、さらに北西隅には別の住居址と思われる大きな遺構が検出された。石圓炉は、中央に土器を置く石圓埋甕炉である。他に南壁際に焼上がり見られるが、別の住居址の地床炉になるかは不明である。北西の遺構は、底面のレベルからIVL 5 c 4で検出されている石圓炉を持つ住居址の南東壁にあたるものと考えられる。

本調査区からは、他にも柱穴状の遺構3基が検出されているが、炉に近かったり、住居の壁の外側にあつたりと、どちらの住居址とも関連がないと考えられるが、所属する遺構については不明である。

本調査区からは、225点の陶文土器片、磚・石器が出土している。

石圓埋甕炉を持つ住居址の時期は、炉体土器（第11図3、図版9-3）から曾利1式期と考えられる。

#### IVL 6 e 2 (第5図、図版4-4)

調査区全体から120点余の遺物を出土しながら、ローム漸移層を経ずにローム面に至る。特別堅く踏みしめられている感じはなかったが、西壁際には遺構があり、焼土が検出されていることから、それが石圓炉址の炉石の抜かれた痕跡であり、調査区全体が住居址内であることが理解される。

また、北壁際には大きな遺構が検出されている。IVL 5 e 5で検出されている炉址に伴う住居址の南端であると理解しているが、遺構の底面レベルの方が、20cmほど低く結論を先送りしたい。

この他にも、柱穴状の遺構が3基検出されている。炉址に近いものもあるが、一応この調査区で検出された住居址に伴うものとしておきたい。床面からの深さは、北から南へ56cm、25cm、34cmである。

遺構の時期は出土した土器（第11図4、図版9-4）。

#### IVL 6 e 4 (第5図、図版4-5)

表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。ローム面はなだらかに南へ傾斜している。調査区内に3基の柱穴状の遺構が検出されているが、遺構との関連は不明である。ただ、IVL 6 e 2で検出されている炉址を持つ住居址の大きさによっては、その範囲内となる可能性もある。

遺物の出土はなかった。

#### IVL 7 e 1 (第5図、図版4-6)

調査区の表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。南側に一段傾斜した後、また平坦気味となる遺構のものがあるが、縄文時代の住居址に見られる壁面や床面、あるいは覆土とは様子が異なる。烟を大きくする以前の道の跡になるのではないかと考えられる。同様の傾斜は、IVM 7 e 1でも観察することができる。

この遺構の他、中央や北側に、径25cm、深さ13cmほどの柱穴状の遺構が検出されているが、他の遺構との関連は不明である。

#### IVL 7 e 3 (第5図、図版4-7・8)

表土層を取り除くと、ローム混じりの荒れた土層となる。それを取り除くとロームの下層にある礫混じりのロームとなる。その中に柱穴状の遺構が2基検出された。

東西際の遺構は、深さが40cmほどで、覆土内に磨製石斧や土器片が人為的に埋めたかのように出土した。

北西隅の遺構は、深さが40cmある。

#### IVL 7 e 5 (第5図)

35~40cmの厚い表土層を取り除くと、ロームや礫混じりの荒れたローム層となる。ローム面の傾斜がきつくなり、凹凸も激しくなる。本調査区からは、遺構の検出はなかった。

#### IVM 4 b 3 (第5図、図版5-1)

表土層を取り除いた後、掘り下げにはいるが、全体から50点余の遺物の出土があり、遺構に関わるものと考えられたが、柱穴状の遺構が多数検出できただけである。この調査区では、IVM 4 e 2、IVM 4 e 4で検出された住居址の西端が検出されるのではないかと考え精査したが、確認できなかった。

#### IVM 5 b 2 (第5図、図版5-2)

表土層を取り除いた後、遺物包含層、ローム漸移層を経てローム面に至る。土坑状あるいは柱穴状の遺構が多数検出されたが、土層の堆積状態からも大きな住居址などの遺構が伴うものではない。

遺物は、包含層より75点の出土があった。

#### IVM 6 b 5 (第5図)

20cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。遺構の検出や遺物の出土はなかった。

#### IVM 7 b 4 (第6図)

30cmほどの表土層を取り除くとロームブロックや礫を含む荒れた黒色土となり、その後にローム層となる。遺構の検出や遺物の出土はなかった。

#### IVM 4 c 5 (第6図、図版5-5)

表土層を取り除いた後、掘り下げにはいる。調査区全体で80点ほどの遺物が出土している。調査区の北西隅にはローム漸移層が残っており、西側にはそれがないことから、西側に向かって遺構がありそうであるが、平面では確認ができなかった。ローム面のレベルはほぼ平坦であるが、堅く締まった感じはない。柱穴状の遺構が集中している箇所として報告しておく。

柱穴の深さは14cmから35cmと様々であるが、20cm前後の柱穴が西側を中心に弧状に並んでいるように見える。

#### IVM 5 c 4 (第6図、図版5-6)

表土層を取り除いた後、掘り下げにはいるが、土層内に比較的大きな縄文土器片などが出土し始め、焼土なども確認された。土層の観察からは遺物包含層を経てローム漸移層、ローム層と続くことから、住居址などの大きな遺構はないと考えられる。ローム面は比較的平坦であるが、堅く締まった様子はない。

ローム面で、柱穴状の遺構を10基検出したが、調査区の壁の土層観察からはローム漸移層から掘り込まれている。遺構の深さはローム面から14cm~57cmと様々である。

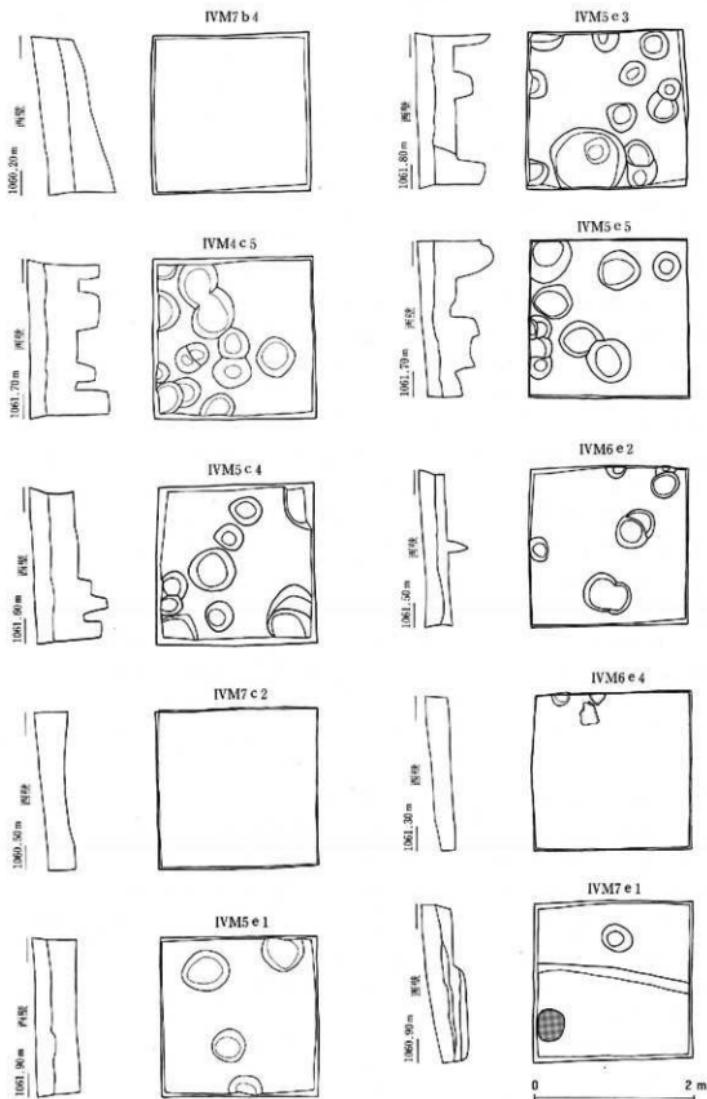
遺物は、70点余が出土している。その中には、藤内1式期の大形破片（図版11-3）も含まれている。

#### IVM 7 c 2 (第6図)

表土層は30cmから40cmと比較的厚いが、これを取り除くと直ちにローム面に至る。検出された遺構、出土した遺物はなかった。

#### IVM 5 e 1 (第6図、図版6-3)

表土層を取り除いた後、ローム漸移層を経て徐々にローム層へと変化していく。ローム面はほぼ平坦であるが、住居址等の大きな遺構はないものと思われる。



第6図 検出された造構と土層堆積状態(4) (1/60)

本調査区からは、4基の柱穴状の遺構が検出されている。北西隅の遺構は深さが43cmとかなりあるが、他の遺構は北からそれぞれ17cm、15cm、27cmと浅い。

#### IVM5e3 (第6図、図版6-4)

表土層を取り除いた後、ローム漸移層を経て徐々にローム層へと変化していく。ローム面はほぼ平坦であるが、住居址等の大きな遺構はないものと思われる。

調査区内には大小13基の土坑状・柱穴状の遺構があるが、深さは7cmから42cmと様々である。

#### IVM5e5 (第6図、図版6-5)

表土層を取り除いた後、ローム漸移層を経て徐々にローム層へと変化していく。ローム面はほぼ平坦であるが、住居址等の大きな遺構はないものと思われる。

調査区内には大小10基の柱穴状の遺構があるが、深さは10cmから64cmと様々である。

#### IVM6e2 (第6図)

表土層を取り除いた後、ローム漸移層を経て徐々にローム層へと変化していく。ローム面はほぼ平坦であるが、住居址等の大きな遺構はないものと思われる。

調査区内には大小8基の柱穴状の遺構があるが、深さは14cmから48cmと様々である。

#### IVM6e4 (第6図、図版6-6)

20cmほどの表土層を取り除くと、直ちに平坦なローム面となるが、堅くよく踏み固められており、間違いなく住居址内になるものと考えられる。北西隅に、12cmほどの深い柱穴状の遺構が1基あるが、本調査区が住居址内のどの位置にあたるのかは不明である。

#### IVM7e1 (第6図、図版6-7)

調査区の南側が約20cmほど低くなっている、底面に焼土の見られる箇所があるが、底面全体に粒子の細かい暗褐色土があり、その上層にロームブロックが多く混じる再堆積した上層が見られ、他の住居址の堆積と大きく異なる。

北側の一段高いところに、深さ25cmほどの柱穴状の遺構が1基あるが、南側の低いところとの関係は不明である。

#### IVM7e3 (第7図)

表土層を取り除くと、直ちにローム層となる。ローム面は傾斜しており、遺構の検出や遺物の出土もなかった。

#### III A4b3 (第7図、図版6-8)

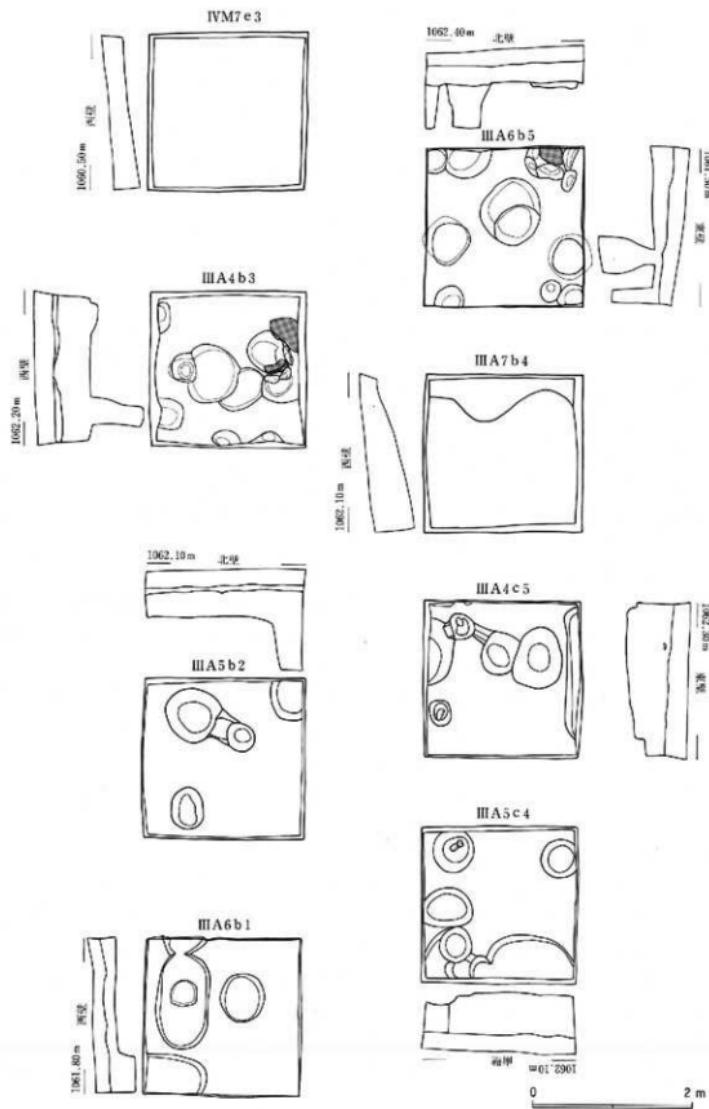
表土層とその下層にある黒色土を取り除くと、40cmほどの暗褐色土を経てローム面に至る。ローム面はよく踏み固められて締まっており、住居址の床面であることが理解される。調査区の東壁際には焼土が2箇所と、石囲炉に使われたと考えられる礫がわずかに残っている。

柱穴、あるいは土坑となる遺構は9基あるが、南西隅のものが65cm、西側中央のものが47cmと深い他は、8cmから24cmと浅いものである。

住居址の床面のレベルはほとんど同じであるが、出土した遺物を見ると、新道式期のものと曾利1式期のものが混じっており、それぞれ復元により完形品になることから、2軒の住居址が重複している可能性もある。

#### III A5b2 (第7図、図版7-1)

表土層とその下層の黒色土を取り除くと、暗褐色土となり、徐々にロームへと変わっていく。このことか



第7図 検出された遺構と土層堆積状態(5) (1/60)

ら、住居址などの大きな遺構に関わると考えられないが、柱穴状の遺構はいくつか検出されている。

北東隅のものは、深さが63cmともっとも深い。また、南西隅のものは、深さが14cmともっとも浅い。北側に3基つながっているが、西からそれぞれ深さ32cm、14cm、25cmである。

#### III A 6 b 1 (第7図、図版7-2)

表土層を取り除くと、ローム漸移層となり、徐々にロームに変わっていく。住居址などの大きな遺構はないものと考えられるが、土坑状あるいは柱穴状の遺構がいくつか検出されている。遺構の形態は様々であるが深さはいずれも20cm前後と浅い。

#### III A 6 b 5 (第7図、図版7-3)

表土層を取り除くと暗褐色土となり、20cmほどでローム面となる。ローム面は平坦で、北東隅に焼土が検出されたことから、本調査区が住居址内であることが確認された。

炉の周辺は、10cm前後の小さなくぼみが多数あいており、炉石が抜き取られた様子を示している。

柱穴状の遺構9基検出されているが、深さがもっとも浅いもので41cm、深いもので63cmと、いずれもしっかりしたものである。炉に近接しているものが多く、すべてが本調査区で確認された住居址のものになるとは考えられない。

#### III A 7 b 4 (第7図)

表土層を取り除くと直ちにローム面となるが、南に向かって傾斜がきくなる。

本調査区からは、遺物の出土もないことから、遺構はないものと考えられる。

#### III A 4 c 5 (第7図、図版7-4)

表土層を取り除くと、暗褐色土となり、徐々にロームへと変わっていく。調査区全体にかかる住居址等の遺構はないと考えられるが、5基の柱穴状の遺構が検出されている。西壁際の遺構が深さ96cm、東側の遺構が73cmとこれに続く。他の小さいものは、25cmから32cmと浅い。柱穴をつなぐように溝状となっている箇所もあるが、どれも途中で途切れしており、住居址の周溝とはならないであろう。

東壁際にある遺構は、IIIA 4 e 4、IIIA 5 e 1、IIIA 5 e 3で検出された住居址と底面レベルがほぼ同じであるため、その西端ではないかと考えられるが、やや不整形である。

#### III A 5 c 4 (第7図、図版7-5)

表土層を取り除くと、ローム漸移層となり、徐々にロームに変わっていく。住居址などの大きな遺構はないものと考えられるが、土坑状あるいは柱穴状の遺構がいくつか検出されている。遺構の形態は様々であるが深さは5cmから32cmとそれほど深くない。

#### III A 6 c 3 (第8図、図版7-6)

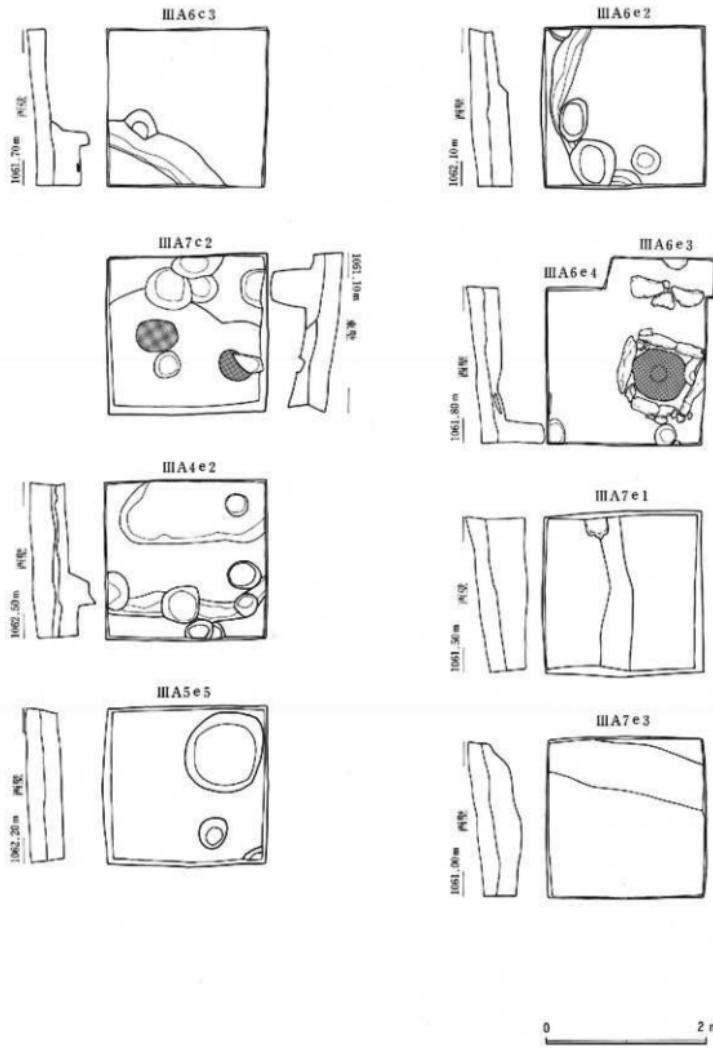
20cmほどの表土層を取り除くと、直ちにローム層となり、南西隅に遺構の掘り込みが検出された。深さは36cmほどである。また、底面からさらに10cmほど深い周溝が壁際で確認されたことから、住居址になると考えられる。前述のIIIA 6 b 5で炉跡が検出されていることから、この住居址の北東端にあたると考えられる。

また、住居址の壁にかかって、深さ20cmほどの柱穴状の遺構が確認されたが、住居址との関係は不明である。

#### III A 7 c 2 (第8図、図版7-7)

表土層を取り除くと、北側は暗褐色土、南側は黒色土または黒褐色土となる。北側は比較的平坦であることから、IIIA 7 e 1で確認された遺構に統くと考えられる。平坦面はわずかで、南に向かうと傾斜する。

北側には5基の柱穴状の遺構が確認されている。深さは29cmから52cmを測る。南側の傾斜面の遺構も一



第8図 検出された遺構と土層堆積状態(6) (1/60)

ム面からは16cmであるが、北側の平坦面からは40cmある。

遺物は、曾利4式期の土器が出土している。

また、傾斜面に焼土が2箇所見られるが、住居址の炉となるものではないであろう。

#### III A 4 e 2 (第8図、図版7-8)

表土層の後、黒色土、暗褐色土と続き、直ちにローム面に至る。ローム漸移層がないことから、住居址など大きな遺構にかかっていると考えられる。南側に東西にのびる周溝が見られることから北側に広がる住居址があると考えられるが、床面が堅く締まっているようなことはない。また、外側にあたる南側とのローム面のレベルは同じである。

遺物は、ほぼ完形となる焼町式土器が出土している(第12図5、図版10-5)。

北側に長径2m、短径1mほどの土坑状の遺構がある。深さは20cmほどであるが、住居址との関係は不明である。この遺構の中にも柱穴状の遺構があるが、土坑との関係、住居址との関係も不明である。深さは土坑底面から10cmほどである。

周溝に近接して柱穴状の遺構が5基ある。深さは13cmから33cmである。

#### III A 5 e 5 (第8図)

表土層を取り除いた後、20cmほどの暗褐色土を経てローム面に至る。ローム漸移層がないことから何らかの遺構内の可能性もある。調査区の南東隅に、ローム面より8cmほどであるが高いところがあり、これがその遺構の一端を示すのではないかとも考えられるが、周辺の調査区では確認されてない。北東側に径1m、深さ10cmほどの土坑状の遺構がある。また、南東にも深さ25cmの柱穴状の遺構が確認されている。

#### III A 6 e 2 (第8図、図版8-4)

調査区の西側に、南北にのびる周溝が検出されているが、東側に広がる住居址になるものと考えられる。住居址の外側にあたる西壁際と床面とは15cmほどの段差がある。壁際には周溝がめぐっているが、床面からはさらに12cm下がる。周溝に近接して4基の柱穴状の遺構がある。深さは北西隅のものが13cmと浅いが、他の40cmから64cmと深い。

遺物は、住居址内から曾利2式期の縄文土器が出土している(図版11-10)。

#### III A 6 e 4 (e3) (第8図、図版8-5・6・7)

表土層を取り除くと、直ちに石囲炉の炉石が現れ始めたほか、復元可能な大きな土器が多く縄文土器片とともに出土し始める。

石囲炉は大きな炉石を縦に埋めた掘り炬燧状のものである。北壁際にも礫がいくつか出土しており、土器が伏せられた状態で出土している。炉の北側に当たることから、石壇になる可能性もある。伏せられた深鉢の底部は欠損しているが、耕作上がりちょうどそこまで至っていることから、土器が伏せて置かれたときに底部がすでに欠損していたのか、後世に破損したのかは不明である。この土器も含め、多くの復元可能な曾利4式期の土器が出土しているが、1点だけ曾利2式期の復元可能な縄文土器も出土している(第12図6-10、図版10-5~11-1)。これについては、所属する遺構がはっきりしていない。

#### III A 7 e 1 (第8図、図版8-8)

表土層を取り除くと調査区の東側は直ちにローム面となる。北東隅は前述のIII A 6 e 4で検出された石囲炉址周辺の床面と同レベルであり、堅い面が見られるため、このあたりまで住居址がのびていたのであろうが、壁面は削平されてしまっていると考えられる。

本調査区では西側半分が40cmほど低く、さらに平坦になっているが、III A 7 c 2 のローム面と底面がほぼ同

じレベルであることから、大きな遺構になる可能性もある。ただ、遺物の出土がないことから、住居址などの遺構の可能性は少ないものと考えられる。

#### III A 7 e 3 (第8図)

北東隅が高く、南西隅とは40cmほどの段差を持っているが、底面は平坦ではなく、遺物の出土もないことから、住居址などの遺構になることはないとと思われる。

#### IV K 5 e 1 (第9図、図版2-4)

表土層を剥ぐと、遺物包含層を経て漸次ローム面に至る。遺物の出土も包含層内に16点が散在していただけで、大きな遺構に関係するものはない。

検出された遺構は、北東隅の溝状遺構、南東隅の遺構、南西隅の遺構の3基である。

北東隅の溝状遺構は、住居址の周溝かとも考えられるが、IV K 4 e 4 をはじめ、周辺に継続する可能性のある遺構が検出されていないことから、小さな何らかの遺構になると考えられる。

南東隅の遺構は、ローム面からの掘り込みは35cmほどである。掘り下げた面積が狭く、この部分では周溝が確認されていないが、IV K 5 e 3 、IV L 5 b 2 で検出されている周溝と併せて、住居址をなすものと考えられる。住居址の規模は、IV K 5 e 3 とIV L 5 b 2 で検出されている周溝の間隔から、径が5.3mほどの隅丸方形になるものと考えられる。

南西隅の遺構は、形態が不整形で、深さも30cmほどである。小さな土坑になるものと考えられる。

#### IV K 5 e 3 (第9図、図版2-5)

北西に大きく弧状を描くものは、底面に鉄製の工具による工具痕を持つもので、時期の新しいものである。遺構の検出の際、北西隅にこれよりさらに新しい土坑が掘り込まれていると考え、その掘り下げを優先したが、全体の掘り下げや、北壁の観察の結果、幅1mほどの溝になることが確認された。覆土は大きなロームブロックを多量に含んでおり、掘り上げた後に直ちに埋め戻しを行ったかの様な埋没状況である。調査区内では弧状になっているが、全体がどのようになるかは不明である。

南側中央に南北に走る2本の溝は、前述のIV K 5 e 1 、IV L 5 b 2 とで検出された住居址の周溝になるものと考えられる。拡張が行われたものと考えられる。周溝東側の床面は非常に堅く踏み固められている。

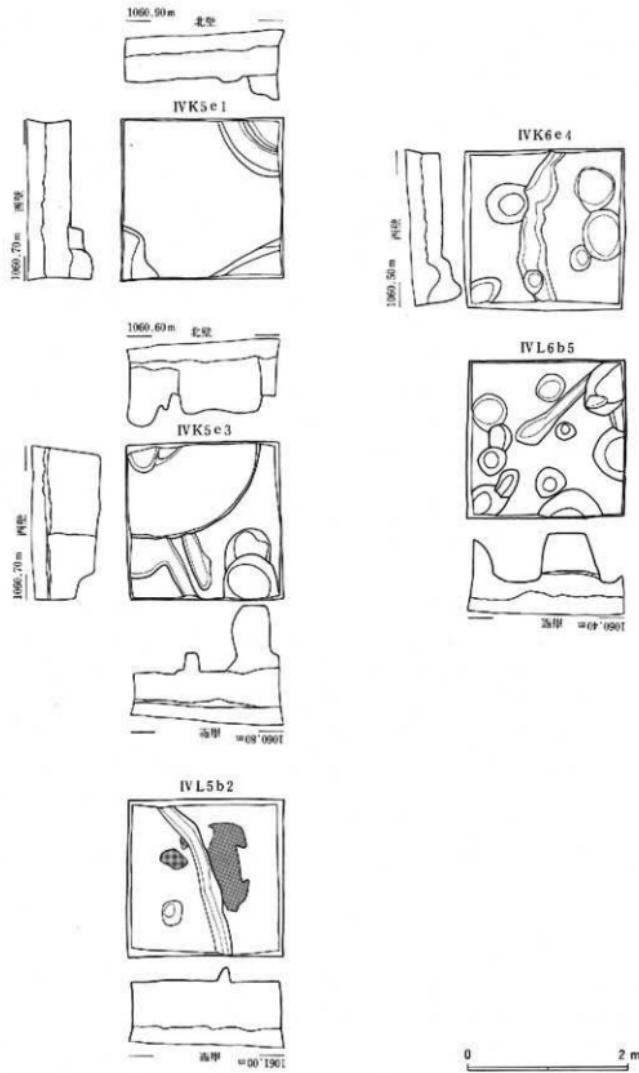
他に、住居址の内側である東側に2基の遺構、周溝と重複して西側に1基の遺構が見られる。南東隅の遺構は、深さが85cmあり、壁面が一部袋状となっているが、柱穴と考えていいであろう。その北側の遺構は深さが20cmほどで、上面は張り床となっていた。南西隅の遺構は深さが22cmである。

遺物は、完形となるようなものはないが、やはり住居址内と考えられる東側に集中している。

#### IV L 5 b 2 (第9図、図版3-5)

表土層を取り除いた後、徐々に掘り下げていくが、遺物の出土が多く、住居址であることを確信する。床面までは、地表面から80cmと厚く、遺存状態も非常によい。調査区の中央に地床炉があり、住居址のちょうど中央にあたることが確認される。床面は平坦で、堅くよく縮まっている。その後、中央を南北に走る周溝が確認されたが、その周溝を貼り床して地床炉が作られていることから、この地床炉を持つ住居址の方が新しいと理解される。調査区の四方の壁の土層観察からも、特に変化がなく、このことが確認されている。この住居址の形態や規模は明らかでないが、後述するIV L 5 c 4 の北西隅に掘り込まれた遺構が南東端になると考えられる。

周溝を持つ住居址は、先にIV K 5 e 1 で掘り込みが、IV K 5 e 3 で周溝が確認されている住居址と同一のものであると考えられる。



第9図 検出された漬構と土層堆積状態(7) (1/60)

この遺構の時期は、出土している縄文土器（図版11-4）から、井戸尻3式期になると考えられる。

この調査区には周溝の西側に小さい遺構が19基検出されている。径は30cmほどであるが、深さは50cmあり、柱穴として良いのではなかろうか。

#### IVK 6e4 (第9図、図版2-8)

調査区の中央に弧状に周溝が走っているが、内外とも高低差はない。床面らしい堅さも見られないが、IVL 6b5で検出されている周溝内の床面の高さとはほぼ同じであることから、同一の住居址になるものと考えられる。

住居址内となる東側には深さが40cmほどの柱穴が2基と、20cmほどの浅いビットが見られる。

住居址の外側となる西側にも深さ20cmほどと7cmの2基の浅いビットが検出されている。

遺物は、住居址内と考えられる東側と、その中にある柱穴から出土しているが、量は少なく、30点ほどである。

#### IVL 6b5 (第9図)

調査区内全体より100点余の縄文土器片などの遺物が出土し、北東隅から南西に向かう周溝、土坑や柱穴状の遺構多数が検出された。

周溝は、前述のIVK 6e4で検出された周溝に伴う住居址と関連すると考えられる。近隣では、IVL 6c3にも周溝が検出されているが、周溝の方向が一致しない。IVL 6c3の周溝の方向からは、本調査区全体を含む住居址が想定される。周溝の北西、あるいは南東で検出された土坑あるいは柱穴と考えられる遺構は、それぞれの住居址に関連するものであろう。

#### IVM 6b1 (第10図、図版5-3・4)

表土層を取り除いた後、包含層の掘り下げにはいる。掘り下げ開始当初より、住居址が重複している可能性のあることが確認されていたが、少なくとも2軒の住居址が重複している。遺構確認面から10cmほど掘り下げると、20cmから30cmの幅で平坦な箇所があり、さらにそれぞれの住居址の掘り込みが確認される。

遺物の出土が非常に多く、しかも復元が可能となる縄文土器もいくつか出土したため（第11図8・9、図版9-8・9）、遺物の取り上げを行いながらの作業は困難を極めた。

2軒の住居址の床面はほぼ同レベルで、調査区の上層観察でも新旧関係を確認することはできない。

西へのびる住居址は、IVL 5e5で石壙炉が検出された住居址の東端、南へのびる住居址は、後述するIVM 6c3で東南端が検出されている住居址の北端にあたると考えられる。

遺構内には柱穴状の遺構が7基検出されているが、もっとも深い中央の柱穴が深さ50cmで、他の柱穴にはすべて貼り床がなされていた。

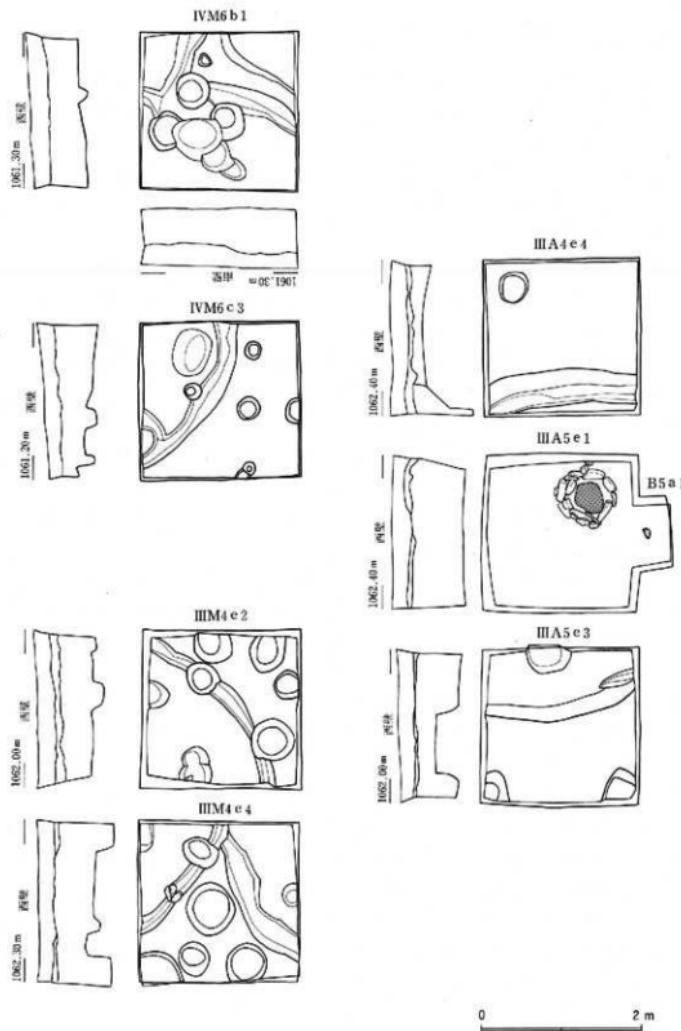
遺構の時期は、曾利1~2式期になると考えられる。

#### IVM 6c3 (第10図、図版5-7・8)

前述のIVM 6b1で住居址が検出されていたため、期待を持って掘り下げを開始したが、20cm足らずの表土層を取り除くと、直ちに平面プランが検出された。住居の南東端にあたる部分を掘り下げると、縄文土器の一括資料（図版11-8）をはじめ、多くの遺物が出土し始める。住居址内は壁際に周溝が回り、その近くで深さ28cmの柱穴が確認されている。周溝に接して、深さ30cmほどの小さなビットも検出されている。

住居址外にも小さな柱穴状の遺構が5基検出されているが、住居址との関連は不明である。深さは9cmから33cmと様々である。

検出された住居址の時期は、出土した縄文土器から、曾利1~2式期と考えられる。



第10図 検出された造構と土層堆積状態(8) (1/60)

#### IVM 4 e 2 (第10図、図版 6-1)

表土層とその下層にある黒色土を取り除くと、南西に広がる住居址のプランが確認された。遺構確認面から床面までの深さは20cm余である。住居址の壁際には深さ4~5cmの周溝が回っている。この住居址は統くと考えられる遺構が、後述するIVM 4 e 4でも確認されている。柱穴と考えられる遺構は南壁際にあるが、重複している。どちらも55cmほどの深さがある。西壁際の遺構は深さが9cmと浅い。

住居址の周溝にかかるて2基の柱穴状の遺構があり、さらに外側にも3基の遺構があるが、住居址との関係は不明である。深さは20cmから50cmと様々である。

#### IVM 4 e 4 (第10図、図版 6-2)

掘り下げを行うと、2軒の住居址プランが確認された。北西に広がる住居址は、前述したIVM 4 e 2で検出された住居址につながるものと考えられる。また、北東に広がる住居址は、前述したIII A 4 b 3で検出されているかに付く住居址と関係するものと考えられる。

この2軒の住居址プランの外側からも、柱穴状の遺構が4基検出されている。いずれも深さが20~30cmあるが、本調査区で検出された住居址に関係するものかどうかは明らかでない。

#### III A 4 e 4 (第10図、図版 8-1)

調査区の南隅に住居址の北端が検出された。壁際に周溝が見られる。後述するIII A 5 e 1、III A 5 e 3で検出された住居址と同一のものである。

この住居址の外側、北西隅に深さ26cmほどの柱穴状の遺構があるが、住居址との関係は不明である。

#### III A 5 e 1 (B 5 a 1) (第10図、図版 8-2)

表土層とその下に統く薄い黒色土層を取り除くと、遺物を多量に出土する暗褐色土が60cmほど統き、堅くよく縮まった住居址床面に至る。遺物は覆土内全体から出土するが、特に床面から20cmほど浮いたところからは、復元により完形となる土器がつぶれた状態でいくつも出土した。

調査区の北西側にはしっかりした石圍炉がある。

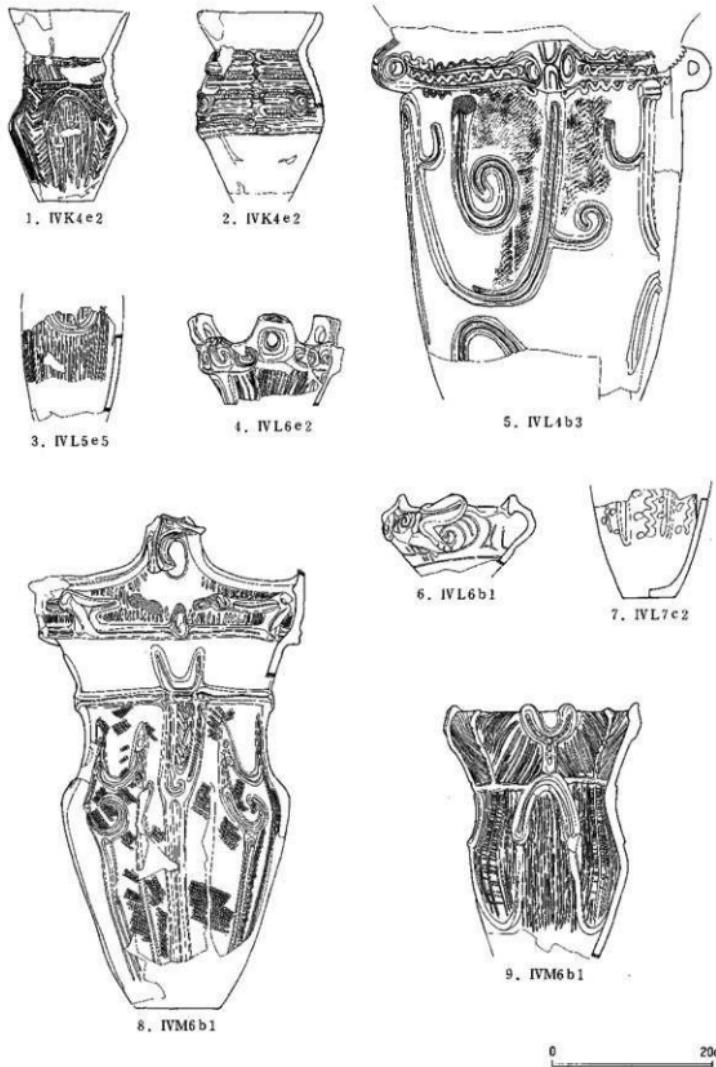
住居址の時期は、出土した多くの遺物(第12図1~4、図版10-1~4・11-5~7)から藤内2式期~井戸尻1・2式期になると想われる。

#### III A 5 e 3 (第10図、図版 8-3)

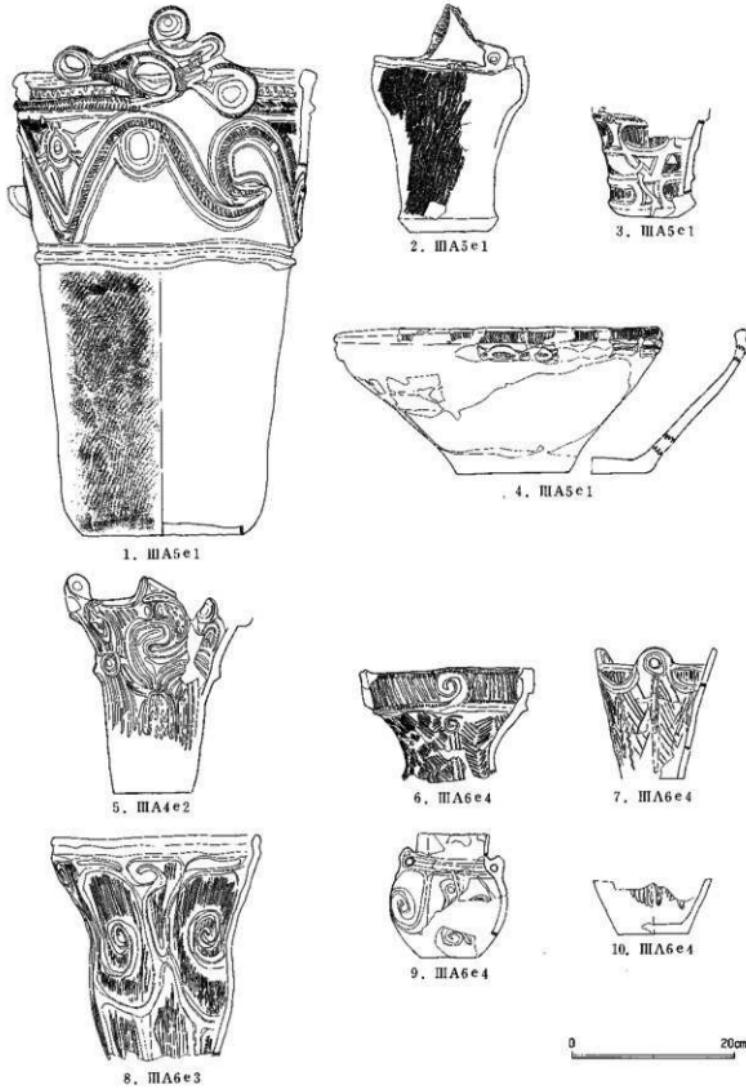
前述したIII A 4 e 4、III A 5 e 1 (B 5 a 1)で検出された住居址の南端が北側で検出されている。III A 4 e 4で確認されている周溝は、東側で検出されたが、全周はせずに途切れている。III A 4 e 4の住居址北端から本調査区の住居址南端までは約8mあり、かなり火形の住居址であることがわかる。III A 4 c 5の東側で床面レベルが同じ遺構を確認していることから、炉を中心南北に細長い住居址になるものと考えられる。

住居址内には深さ70cmを超える大きな柱穴が検出されている。

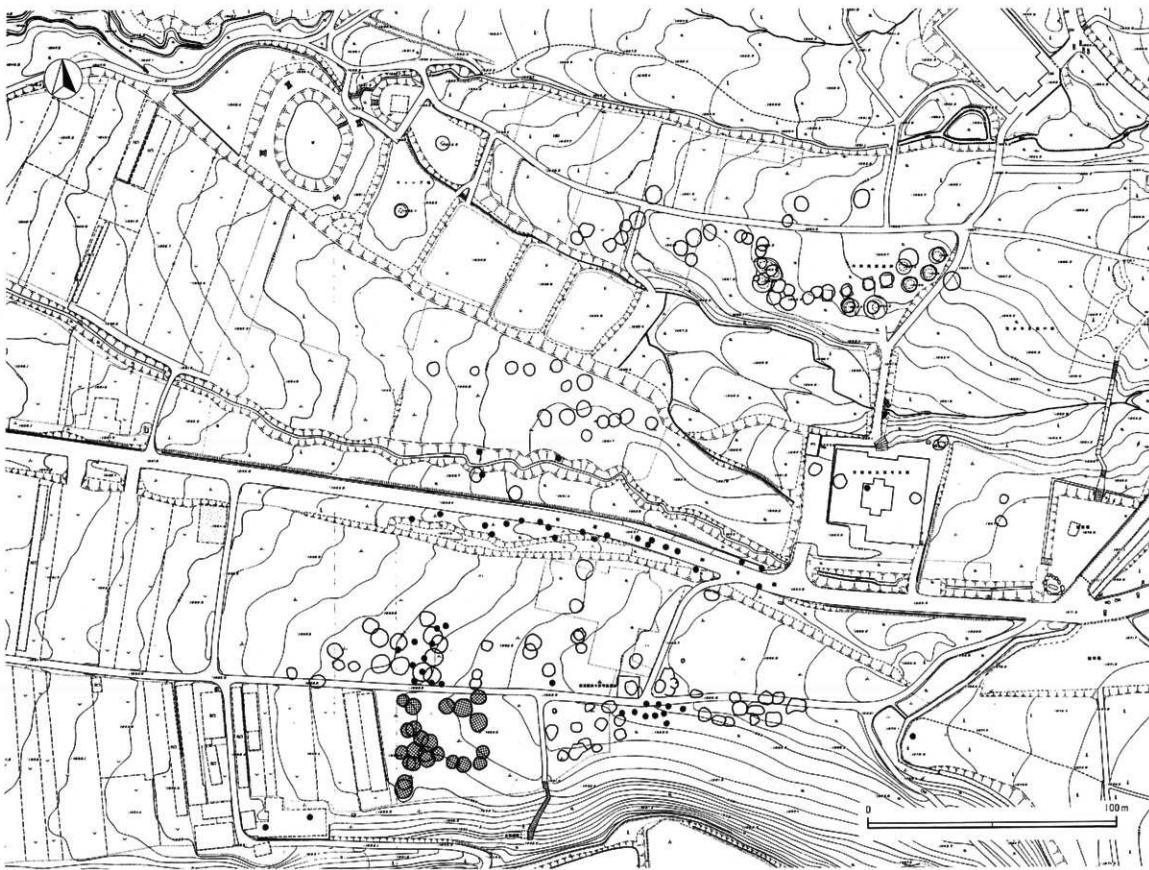
住居址の外側にも、調査区の南西隅と南東隅に柱穴状の遺構が検出されている。深さは南西隅のものが25cm、南東隅のものが13cmである。



第11図 出土土器(1) (1/6)



第12図 出土十器(2) (1/6)



第13図 遺構分布図 (1/1,500)

## 第4章 まとめ

茅野市教育委員会では、平成2年度から尖石遺跡整備のための事前の遺構確認調査を実施してきた。今回調査を行ったのは、尖石遺跡の南側である。

この地区は、宮坂英夫氏が全く調査を行ったことのない箇所であるが、これまでの試掘調査の成果からも、縄文時代中期前半の集落と後半の集落の接点となっている箇所であり、多くの遺構の検出が予想されるところであった。また、今後の尖石遺跡の整備を進めるにあたって、復元する住居の選定や、仮設してある園路の設計に欠かせない重要な地点でもあった。

その重要な地点の調査を行うにあたって、これまでの遺構の位置とプランを確認する作業、さらに遺構の時期を確認するため、今回は計画したグリッドの中は徹底的に調査を行い、遺構の性格を把握することとした。

計画では、調査対象面積を約2,000m<sup>2</sup>、調査面積はその1/5の400m<sup>2</sup>を考え、2m四方のグリッドを100箇所設定した。しかし、遺物の出土が多く、遺構の検出が予想以上であったため、思うように調査が進まず、最終的には対象面積1,200m<sup>2</sup>、グリッド数にして65箇所、260m<sup>2</sup>の調査となり、東側の調査を次年度に持ち越すこととなった。

調査の成果については、本文で詳述したが、縄文時代中期の住居址が22基検出されたほか、土坑や柱穴になると考えられる遺構も多数検出され、推測通り、尖石遺跡の中でも遺構の密度がもっとも高い場所であることが確認された。

しかし、遺構の数や出土資料の多さに比して、整理期間が非常に短く、復元可能な縄文土器からのみ住居址の時期を判断したため、時期を確定できていない住居址も多い。今後さらに検討を続けたい。

遺構の分布については、遺跡西側の中期前半の集落と、東側の中期後半の集落との接点になることから、それぞれの集落の東端と西端が明らかにできるのではないかと考えられた。しかし、調査範囲内の西端から中期後半の住居址が検出され、東側から中期前半の住居址が検出されるなど、今回の調査範囲内からはそれぞれの集落の範囲を確定することができなかった。

来年度に持ち越してしまった東側において、中期前半の集落の東端を明らかにすることは可能であろうが、中期後半の集落については、西側の土地が未買収のため、明らかにするまでには、さらに時間を要するものと思われる。

# 図 版

図版 1

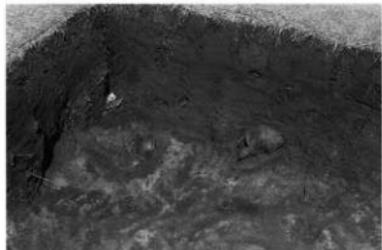


1 造跡遠景（西から）



2 作業風景（北東から）

図版2



1 IV K 4 e 2 遺物出土状態（南西から）



2 IV K 4 e 2 完掘（西から）



3 IV K 4 e 4 完掘（西から）



4 IV K 5 e 1 完掘（西から）



5 IV K 5 e 3 完掘（南から）



6 IV K 5 e 5 完掘（北から）



7 IV K 6 e 2 完掘（西から）



8 IV K 6 e 4 完掘（北から）

図版 3



1 IV K 7 e 1 完掘（南から）



2 IV K 7 e 3 完掘（西から）



3 IV K 7 e 5 完掘（西から）



4 III L 4 b 3 遺物出土状態（西から）



5 III L 5 b 2 遺物出土状態（西から）



6 III L 6 b 1 遺物出土状態（西から）

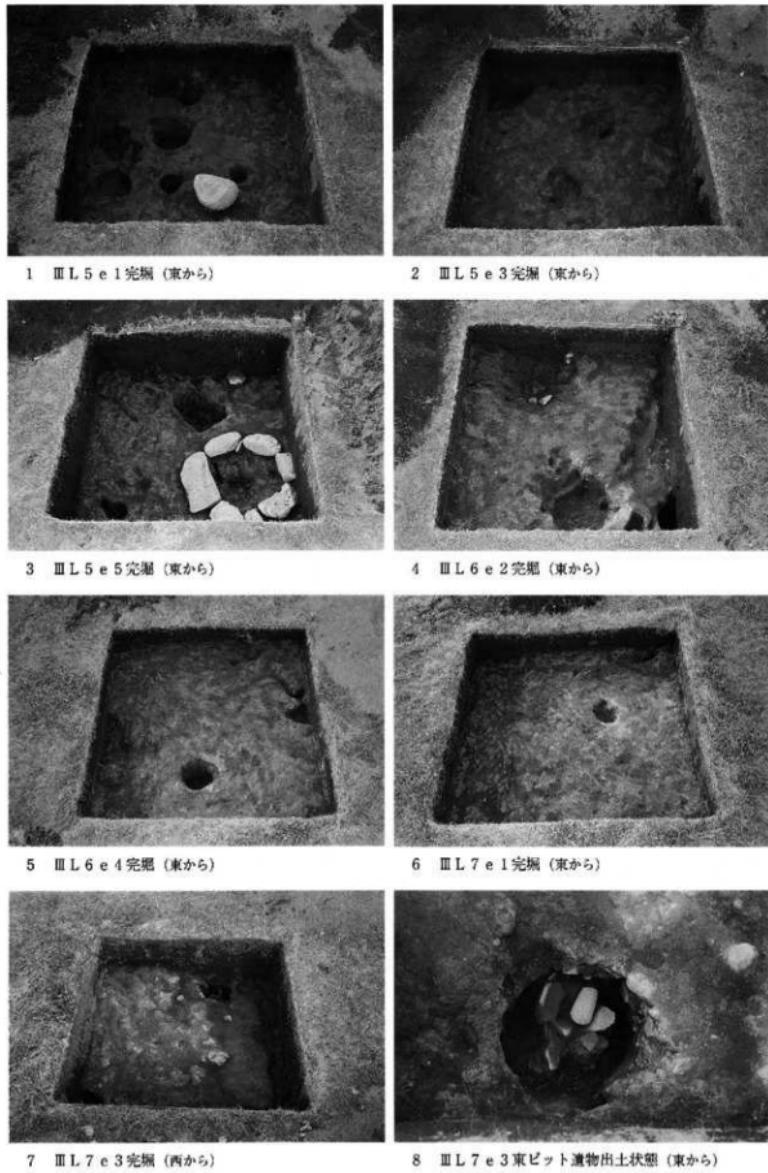


7 III L 5 c 4 遺物出土状態（西から）



8 III L 6 c 3 完掘（西から）

図版4



図版 5



1 IV M 4 b 3 完堀 (東から)



2 IV M 5 b 2 完堀 (東から)



3 IV M 6 b 1 遺物出土状態 (西から)



4 IV M 6 b 1 完堀 (西から)



5 IV M 4 c 5 完堀 (東から)



6 IV M 5 c 4 完堀 (南から)

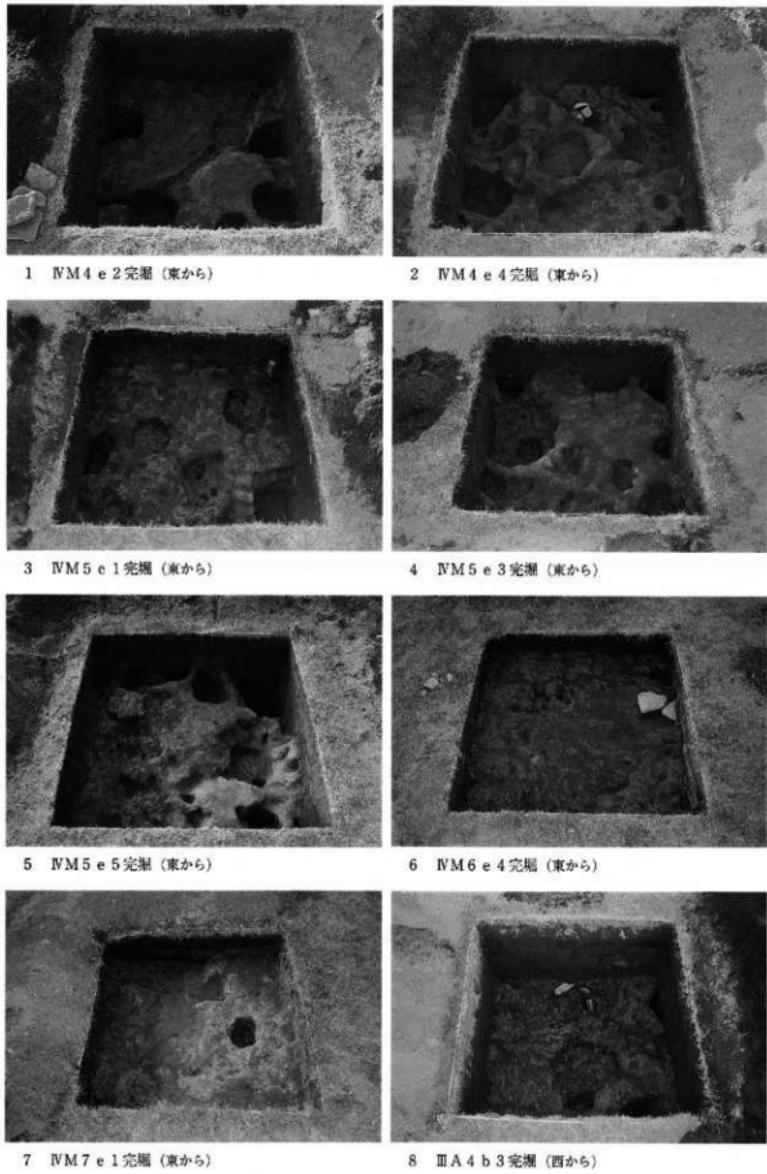


7 IV M 6 c 3 遺物出土状態 (南から)



8 IV M 6 c 3 完堀 (南から)

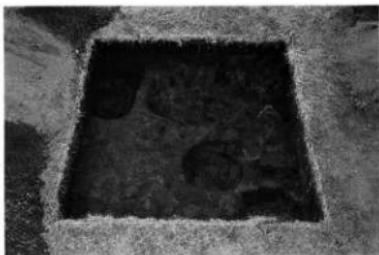
図版 6



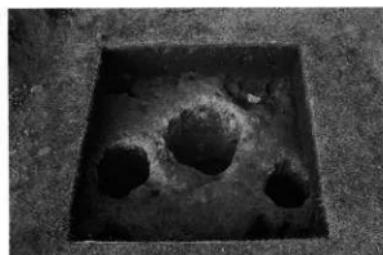
図版 7



1 III A 5 b 2 完堀 (東から)



2 III A 6 b 1 完堀 (東から)



3 III A 6 b 5 完堀 (南から)



4 III A 4 c 5 完堀 (東から)



5 III A 5 c 4 完堀 (東から)



6 III A 6 c 3 完堀 (西から)



7 III A 7 c 2 完堀 (西から)



8 III A 4 e 2 完堀 (東から)

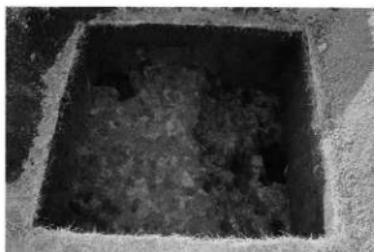
図版 8



1 III A 4 e 4 完掘 (東から)



2 III A 5 e 1 遺物出土状況 (西から)



3 III A 5 e 3 完掘 (東から)



4 III A 6 e 2 完掘 (東から)



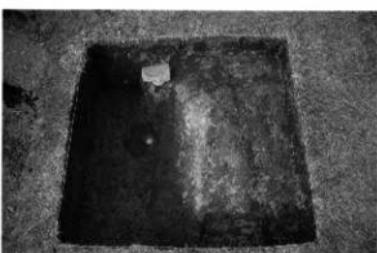
5 III A 6 e 4 完掘 (西から)



6 III A 6 e 4 完掘 (西から)



7 III A 6 e 4 完掘 (南から)



8 III A 7 e 1 完掘 (南から)

図版 9



1 NK 4 e 2 出土土器



2 NK 4 e 2 出土土器



3 NL 5 e 5 出土土器



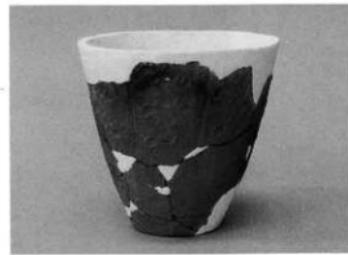
4 NL 6 e 2 出土土器



5 NL 4 b 3 出土土器



6 NL 6 b 1 出土土器



7 NL 7 c 2 出土土器



8 NM 6 b 1 出土土器



9 NM 6 b 1 出土土器

図版10



1 IIIA5e1出土土器



2 IIIA5e1出土土器



3 IIIA5e1出土土器



4 IIIA5e1出土土器



5 IIIA4e2出土土器



6 IIIA6e4出土土器



7 IIIA6e4出土土器



8 IIIA6e3出土土器



9 IIIA6e4出土土器



1 III A 6 e 4 出土土器



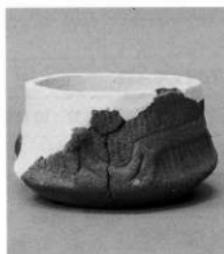
2 IV L 4 b 3 出土土器



3 IV M 5 c 4 出土土器



4 IV L 5 b 2 出土土器



5 III A 5 e 1 出土土器



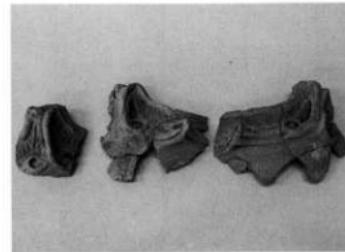
6 III A 5 e 1 出土土器



7 III A 5 e 1 出土土器



8 IV M 6 c 3 出土土器



9 IV L 4 b 3 出土土器



10 III A 6 e 2 出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきとがりいしいせき							
書名	特別史跡尖石遺跡							
副書名	平成13年度記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小林 深志							
編集機関	茅野市教育委員会尖石縄文考古館							
所在地	〒391-0213 長野県茅野市豊平4734-132 TEL 0266-76-2270							
発行年月日	西暦2002年3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
尖石遺跡	茅野市豊平 東側 4,734-2907 他	市町村	遺跡番号				260m <sup>2</sup>	記念物保存修理事業（環境整備）に係る試掘調査
20214	85	360	138	平成13年 7月13日 12月13日				
		36	640					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
尖石遺跡	集落跡	縄文時代 中期	住居址 土坑・柱穴	22基 164基	縄文土器・石器等 コンテナ	30箱		

---

**特別史跡 尖石遺跡**

—平成13年度記念物保存修理事業  
(環境整備)に係る試掘調査報告書—

---

平成14年3月20日 印刷

平成14年3月26日 発行

編集行 茅野市教育委員会尖石純文考古館  
長野県茅野市豊平4734-132

印刷 ほおづき書舗株式会社  
長野県長野市柳原2133-5

---

